



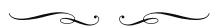
アルペンスキーのボランティアコーチとしての顔も

音楽には子どもの心がいい

会社経営／翻訳家
松矢 英晶



東京フィルのゆかりの方々に、クラシック音楽に魅了されたきっかけや音楽生活について綴っていただく本連載。第27回は、国際金融の現場で長く活躍され、翻訳業や障害者スポーツのコーチとしても第一線で多岐にわたる活動をされている松矢英晶様が、幼少期から海外生活を経て現在に至るまでの音楽とのかかわりについて、また、今年6月の定期演奏会で感じられた新鮮な感動を綴ってくださいました。



クラシック音楽と私の出会いを考えると、それは家の中だったかもしれない。音楽家の家庭という訳ではないのだが両親とも音楽が好きで、洋風の生活様式と西洋のクラシック音楽という家庭だった。弟も私も小学校に上がる頃にヴァイオリンを始め、ジュニアオーケストラで演奏した。音楽に対して特別な思い入れがあったわけではなく、ただこれが普通のことだと思ってヴァイオリンを弾いていた。

中学生になる頃にトランペットに魅了され、ジャズの虜になり、アメリカに留学するときも楽器を持って行った。文字通り小脇に抱えて。留学中は現地のジャズミュージシャンにまじってライブハウスで演奏した。「若さに怖いものなし」そのままの無謀ぶりだが素晴らしい経験をした。

そして二十数年、その間の長い外国生活でも、ジャズとブロードウェイやウェスト・エンドでの芝居見物ばかりで、クラシック音楽のことはすっかり頭から抜けていた。

留学直前、2つのビッグバンドとコンボグループに参加していた頃のカルテット演奏



帰国後しばらくして、東京フィル首席トランペット奏者との知己を得る幸運があった。年末の東京フィル第九交響曲が私にとって久しぶりのクラシックコンサートだったので、少しかこまって演奏を待った。音楽が終わった時にはあまりの感激に腰が抜けたようになり、身体を動かすことも拍手をすることすらできなかった。極限まで感動するようになるのか。

今年6月の定期演奏会、メシアンのトゥランガリーラ交響曲は、私にまた新しい世界を開いてくれた。演奏前、この難解な音楽を聴いて楽しいとは期待していなかった。すると、「マエストロ チョン・ミョンフンが語る：... 子どものような耳で聴いてみて下さい。きっと楽しめると思いますよ」。

音楽が始まると、思いもかけない光景が目の前に現れた：私の眼の前に眠る子供。私が見ているのはその子の寝姿ではなく、眠る子の頭の中。その子の心が何のわだかまりも束縛もなく、純粋なまでに自由奔放に自分の世界を駆けている。ああ、これは子どもの心だ、心というカオスだ。これほど楽しく、美しいカオスが音で奏でられるとは！ 知らぬ間に私は微笑んでいた。音楽が俄然楽しくなってきた。

マエストロ チョンの意味したことを取り違えているかもしれないけれど、私にとって最高のメシアンだった。マエストロのさりげない偉大さにも改めて感服した。

音楽にあふれた生活に感謝と幸せを感じながら、ジャズバンドをかけもちし、せっせと東京フィルのコンサートに通っている。

松矢英晶（まつや ひであき）／米大学大学院（経済学）修了。ニューヨーク、ロンドン、パリ、東京の金融市場で活動。海外投資会社日本代表。コンサルティング会社経営。学術書、財務から紀行文など幅広い分野の翻訳にも携わっている。また十数年来、障害者スポーツのボランティアコーチとして、知的障害者を対象とする国際スポーツ団体スペシャルオリムピックスでアルペンスキーと水泳競技のコーチ、また視覚障害者スキーのサポーター・コーチとして活動している。